

鶴見俊輔と家の思想  
高橋 在也

（千葉刑務所非常勤職員／東京農工大学非常勤講師）

鶴見俊輔には『家の神』（1972年）、『家の中の広場』（1982年）、対談集『家族とは何だろうか』（1996年）といった家を主題とした著作がある。また、家を直接題名に掲げてはいないが『柳宗悦』（1976年）、『アメノウズメ伝』（1991年）などは、家を思想形成の空間として重視しており、この見方は鶴見の著作のひとつの特徴を成している。これらの著作では、家父長制的・権威主義的「家」、あるいは戦時下の家族国家観に支配されている「家」とは違う、社会のなかに別の種類の空間を生み出す「家」が活写されている。一方で、鶴見は、自身の父親が大正期には自由主義者であり、戦時下では体制側の政治家に転向し、戦後に「民主主義者」として再転向したことが、転向研究の経験的出発点になったと述べている。転向現象とサークル運動は、鶴見の主要な研究対象であるが、このふたつは精神の自由とその根づきはどのような条件で基礎付けられるかという問いとして一括できる。そして鶴見にとって「家」とは、精神にとっての支配と自由の両方が起こる複雑な様相を示している。

家とはいったい何であろうか。近代家族論においては、家は、家父長制とロマンティックラブイデオロギーをもって、社会の成員を再生産する抑圧的な場所として位置づけられる。一方で、家という場所では、社会の支配的言説とは別の言説空間を創造する営みをも、（たとえば戦時下のような家族国家観が最も厳しく支配していた社会条件において、回覧雑誌をつくって読み合うような）行われてきた。本発表では、精神の自由にとって家とは歴史的にどのような空間であったのかという問いのもと、鶴見俊輔の抽出している家の像を検討したい。